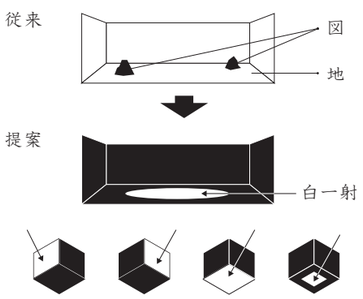
提案手法

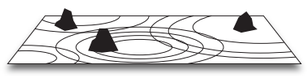
白一射

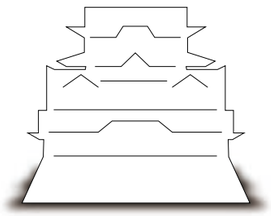


私が提案する「白一射」は、ある空間の何処かに意図的に白を加えることで、空間に多重の図と地を創り出す手法だ。
「白」は地としてカタチが持つ力を引き出してきた。この関係を逆にし、わずかな光をも反射する特徴を活かすことで、「図」としての白を浮かび上がらせ、鑑賞者が自らと対話する空間を設計する。
この名前は「白」を「一」つ「射」ることで僅かな光をも反「射」させ、「百」という多様な可能性にも、「自」という内面にも向き合うことができる手法として名付けた。

名の無い和への模索

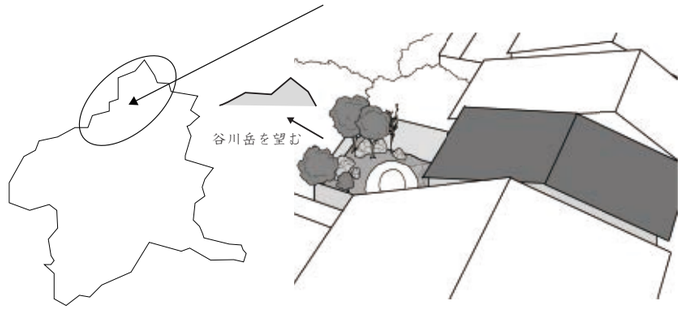
マンセル値：N9.5 に近づく程白で定量的な表現が難しい色でもある
(N10 は完全反射であり、再現不能)
RGB 値：(255,255,255)
16 進数値：#FFFFFF





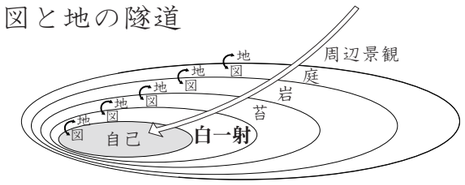
「白」とは全ての可視光線を等しく強く打ち返すことで生まれる色である。
私はこの色は非常に強い特徴を持ちながら、常にその役割は「図」を引き出す能力を持つ「地」の役割を担ってきたと感じた。これは枯山水で見られる岩や苔で表現される世界観や白漆喰総塗籠造で現れる城の威厳などの日本の空間表現に強く表れていることからも分かるだろう。

対象地　群馬県みなかみ町



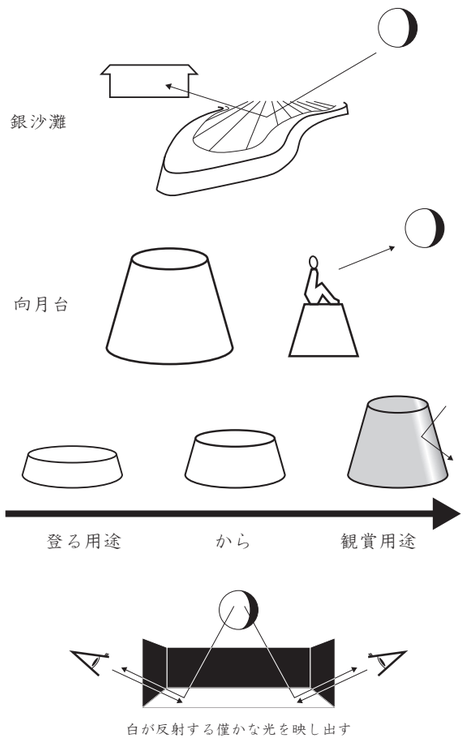
みなかみ町は近年、ウォーターツーリズムに力を入れている地域であり、夏、冬問わず、アクティビティが盛んであることから外国人観光客が年々増加している。
ペンションや民宿も盛んであり、中には日本に移住する外国人も存在する。
その町の一角、民泊を営む町屋の庭という想定で手法の提案を行う。

図と地の隧道

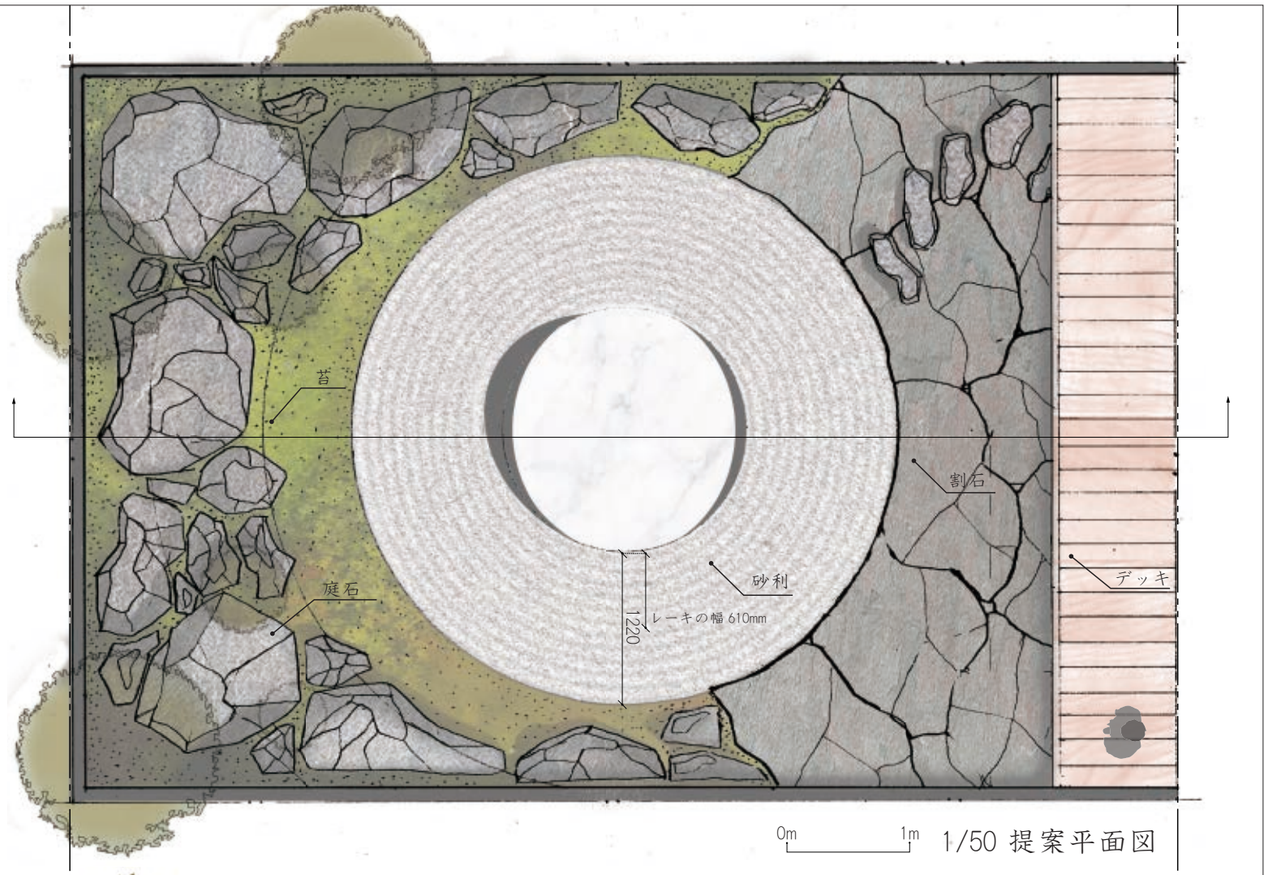


これまでの「白」は枯山水で言えば海などの広い空間を表し、その中の岩を図として世界観を表現する「地」として機能していた。
しかし、この庭では、借景を「地」、庭を「図」とすると同時に、庭そのものが「地」となり、そこに映る「白」が「図」として立ち現れる。更に自らがその白を覗くことでその白が地となり、視線がその内部へと誘導される。こうして、古来より心象の具現化として機能してきた日本庭園の持つ力を引き出すことを目指した。

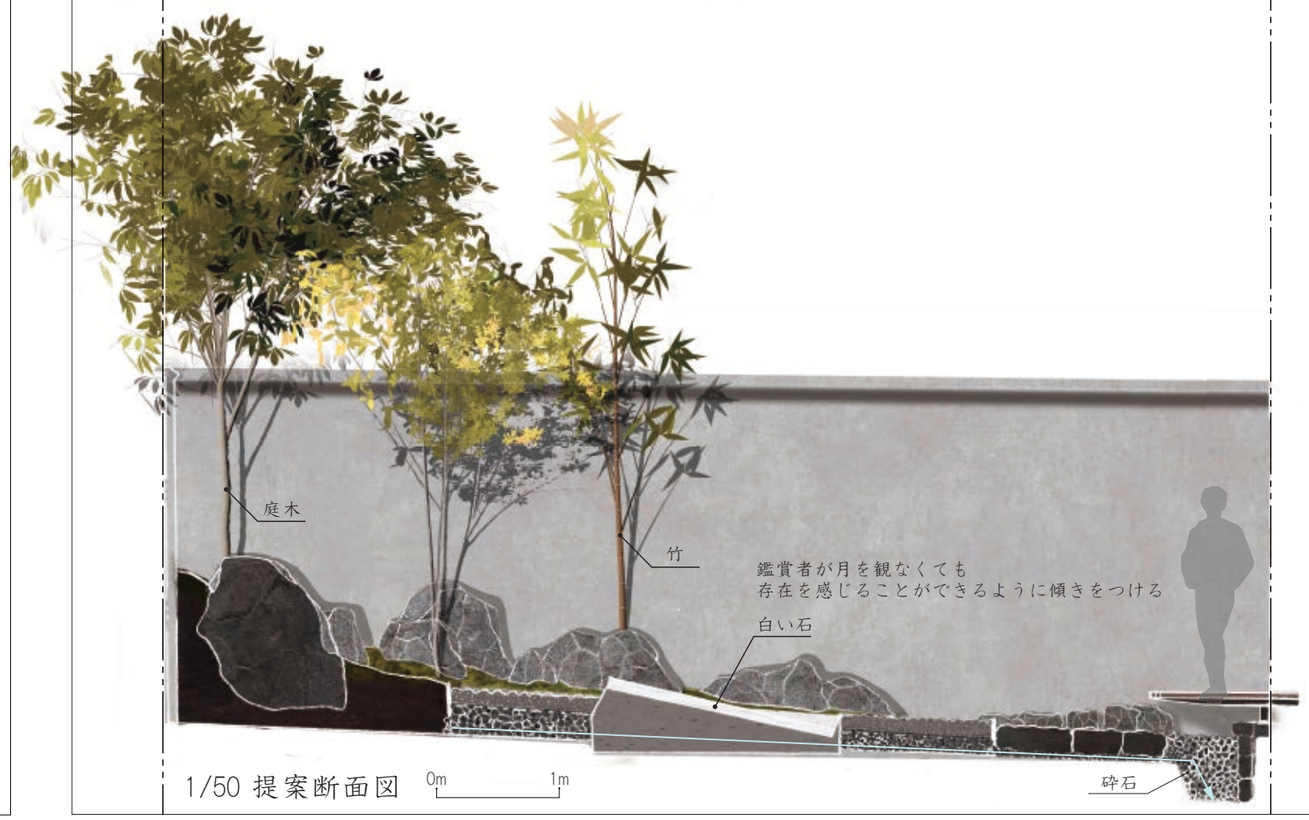
銀沙灘と向月台の再構成



慈照寺銀閣で見ることができる向月台は月を見るために登るもの、銀沙灘は大海を意味し、月の光を反射しておぼろげにその存在を示すものというが通説だ。
私は向月台については、時代とともに徐々に高さが増してきた経緯があり、本来の「登る」という機能から、次第に円錐台が生み出す光の反射へと形状目目的に意識が変わったように感じた。そこでこれらの造形が持つ意味を改めて「映し出すための存在」と解釈し、設計を行う。



1/50 提案平面図

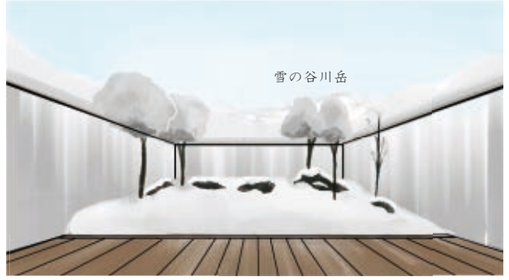


1/50 提案断面図

映すものと向き合う

世界は色で満ちており、落葉や風雨によりこの内庭の中も時を止めることはできない。従ってこの内庭の維持も心象と向き合う手法の一つである。
落ち葉を取り除き、白砂を整え、その「白」を維持しなければならない。しかし、全員が高度な技術は持ちえないため、集中して行うことができ、かつ簡易な形が求められる。従って、用具の寸法から円形状を導き出した。

人為の白と天為の白



今回対象にした敷地は冬には積雪がある。
その場合、この庭に積もる雪はある程度の高さを持つと考えられ、景色は様変わりするだろう。白い庭は図と地のトンネルとしての効果から単純な「地」の性質を強め、その庭は鑑賞者の心象を直接映しだすものとなる。

心象の入口

この庭は日本の自然の根幹を成す水を用いた動的なアクティビティを体験した外国人が泊まることを想定している。日中に体験した激しい水の姿から対照的に、精神において、水が持つ性質を日本人はどのように受け取り、なぜ枯山水の「白」の表現に至ったか感じるだろう。そして、夜には薄明りを映し出す光は自らの存在を照らしだす。これにより、和とは何かを考えさせ、自分の心象がどのようなものか探す入り口となるだろう。